
掌編集

百花

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

掌編集

【Nコード】

N2667N

【作者名】

百花

【あらすじ】

二次創作あり、オリジナルありの掌編集です。
更新は超不定期。

A f t e r i t i s k i l l e d c r u e l l y (前書き)

フリッピーとスプレンドイドのお話。

A f t e r i t i s k i l l e d c r u e l l y

「今日は何人殺したんだ？」

「さあな」

「さあなでは無いだろう？」

堅苦しい口調のスプレンドイドは頭を掻いた。

「俺は周りにいた奴を殺っただけだ。べつにてめえにどうこう言われる筋合いはねえ」

覚醒したままのフリッピーは赤く染まった迷彩服のポケットに腕を突っ込む。

「軍人君」

英雄は悲しげな顔をした。

「フリッピーが悲しむぞ？」

「死ぬよりはマシだろ」

繰り出されたナイフは首筋に辿り着く事無く取り落とされる。

「戻りたまえ。でないと君を殺さなければならない」

「クソ」

軍人は小さく毒づいた。

押さえつけられた右手がじりじりと痛む。

「次会ったときはぜってー殺す」

物騒な言葉。

直後に軍人の瞳が漆黒で塗り込められた。

英雄は手の力を緩めた。

「あれ？」

軍人の声が急に緩む。

「スプレンドイドさん？」

「フリッピー」

英雄は柔らかく笑った。

「これ僕がやったんですか？」

周りの惨劇を見回し、フリッピーは悲しげな顔をした。

「君じゃない。やったのは軍人君だ」

「分かりました」

フリッピーは懺悔するような表情で目を閉じた。

「アイツは僕ですから……やったのは僕です」

フリッピーは振り向いた。

「家に帰りますね。なんだか疲れちゃいました」

苦笑いに似た笑顔でフリッピーは会釈をした。

「さよなら、スプレンドイドさん」

びちゃびちゃと血の海を歩くフリッピーにスプレンドイドはため息をこぼした。

「君は君、軍人君は軍人君だよ。フリッピー」

冬の夜話（前書き）

オリジナルの掌編です。

登場キャラはcross

worldより、弥々華とリップ。

冬の夜話

寒さに体は縮こまる。弥々華は何度目か分からない寝返りをうつた。
「ダメだ。寝れない」

退屈に任せて寝溜めと洒落込んだのが悪かったのだろう。深夜の2
時を過ぎてなお、眠れない。

弥々華はぼうつと暗い部屋を見つめていた。少し埃っぽい、飾り気
の無い部屋だ。

不意に弥々華は低く呻いた。

「喉、乾いた」

弥々華はゆっくりと体を起こした。軽く目眩がした。

「寒……」

パジャマの上から、コートを羽織る。ガサガサして不快だが、生憎
ガウンなんて洒落た物は持っていなかった。

財布をひつつかみドアを開けて鍵を掛ける。

気分転換に、階下^{した}の自動販売機に行こうというのが、弥々華の考え
だ。

A p d s c oの寮とも言える居住棟の廊下は、不気味に薄暗い。暖
房も入っていないのか、背筋がざわざわと栗立った。

「はぁ」

何気なくため息を漏らす。

たどり着いたエレベーターホールは、それなりに明るい。

弥々華はエレベーターのボタンを押した。氷のような冷たさに、弥
々華は体を強ばらせた。

1階からエレベーターがぐんぐん上がってくる。

チーン。

間の抜けた音を立ててエレベーターのドアが開いた。中は目が痛く

なる程、明るい。

1階のボタンを押すと、ドアが閉まった。

内臓がひゅーっとなる感覚と共に下降する。

ドアが開いた。

体を滑らせるように外に出る。自動販売機は煌々と光を放ち突っ立っていた。

「何にしよう……」

飲み物をゆっくりと眺めると、見つけたのは温かいコーンスープ。

「これにしよう」

指先で硬貨を入れ、ボタンを押し込む。

ガダンダン！！

そんな音を立てて落ちてきた缶を取り出す。

「あつたかい」

指先が熱い。でも気持ちいい。

弥々華の顔が僅かに緩んだ。

缶はポケットに入れた。足の付け根が温かい。右手もポケットに入れた。手が柔らかくなるのを感じた。

「あれ？ 弥々華？」

弥々華は不意に名前を呼ばれ、飛び上がった。

「あ、リップ。お帰り」

弥々華は目玉を見開いたまま、それでも柔らかく言った。

「任務明け？」

「うん。そう」

リップは首を縦に振る。

「本当に」

そう言つてリップは欠伸をした。艶が減った髪をかきあげる。

「護衛なんて、ロクな仕事じゃなかったわよ」

柔らかく言つたリップに、弥々華は苦笑した。

「寒かったし？」

「そうそう」

リップはそう言って笑う。

「飲み物でも奢る？」

「いいの？」

リップは珍しいと、呟いた。

「いいよ。お疲れさんって事でさ」

弥々華は事も無げに言々と小銭を手渡した。

「ありがとう」

「気にしなさんな」

リップは自動販売機に小銭に入れる。選んだのはココアだ。

2人は並んでエレベーターに乗る。

「で、護衛ってどんな事したの？」

「小さな男の子の護衛。っていうか子守かな？」

「子守？」

「そう。なんか、政治家の息子だったの。あの能力者否定派の」

「ああ、あの」

弥々華の脳裏に浮かぶのは、連日ニュースで見かけるあの顔だった。いつも能力者を差別した発言を繰り返しては、他の政治家に非難されていた男だ。

「だからさ、大変だったのよ。能力者差別するような事言うし。カエルの子はカエルって奴かな」

その言葉に弥々華が吹き出した。

「あ、カエルってそう言う意味じゃないよ？」

「知ってる……けど」

弥々華はまたゲラゲラと笑い出す。

「やっぱり出るじゃん！！ 顔」

ひたすら笑う弥々華に、リップは苦笑した。

「あ、着いたよ？ 弥々華」

「本当だ」

呼吸を整えるとエレベーターから降りる。

弥々華は頬が引きつるのを感じた。

「じゃ、弥々華。お休み」

「お休み、リップ」

部屋の前で、弥々華は手を降った。

解錠し、ドアを開ける。

弥々華はコーンスープの缶を取り出すとコートを脱ぎ散らかした。

ベッドに腰を投げ出すとスプリングがギシリとなった。

ブルタブを開け、喉にスープを流し込む。

「……ぬるい」

弥々華はムツとした顔で、缶を眺めた。

ぬるいコーンスープは価値が無い、少なくとも半減すると思いながら。

e n d

弥々華 ようこそ、ケロン人ライフ であります（前書き）

ケロロ小队 + 弥々華・小ネタ^{オリキャラ}です。

弥々華 ようこそ、ケロン人ライフ であります

その爆発は不意打ち過ぎて、弥々華は何の対応も出来なかった。
何がどうなった？

意識が無くなる直前、弥々華が考えた事である。

弥々華 ようこそ、ケロン人ライフ であります

「う……あいつたあ」

弥々華は軽い目眩と共に体を起こした。ぺちやりという感覚と共に、
額に僅かな痛みが走る。

「あたた……頭切ったかなあ……」

クラクラとする感覚を抑えつつ弥々華は地面に腰を下ろし、固まっ
た。

「あれ？」

視線がいつもよりも低い気がする。うつぶせになった時とさほど変
わらない場所に、視線があった。

ぐちゃつき始めた頭で、弥々華は何気なく下を見て、今度は愕然と
した。

「……え？」

穿いていた筈のジーンズはどこかに消え去り、代わりになめらかで
艶のある、黒く短い足が生えていた。

「あ……え？」

さらに目に入った指はかなり短く、こちら黒い。

「ちよっと……なんで？」

顔に触るとぺちゃりという感覚が走り、何時もの数倍は大きくなっていた。髪の毛に触れば、それは無く布の感触。顔の横に降りていた。

「……もしかして……あたし」

弥々華は布を握り締める。体の震えが止まらない。

「……ケロン人に……ケロン人になってる……!!」

「弥々華……。あいつどこ行っただ？」

クルルはラボをぶらつきながら、先ほど物置に駆け込んだ弥々華を探していた。

隊長に頼まれたー、と言って駆け込んでから早数時間。流石に心配になったケロロから搜索命令が出たのだ。

「階級章もつけてねえしよ……一体どこに
その時だった。」

「……ケロン人に……ケロン人になってる……!!」

馬鹿みたいな悲鳴が、辺りに響く。クルルは思わず飛び上がり、辺りを見回した。

「あー、なんだ？」

嫌な予感がした。

クルルは悲鳴の中心へ、やる気が無さそうな仕草で歩いていた。さて何をやらかしたのか。

トラブルとアクシデントの匂いが、だんだんと強くなる。そんな事を考えながら角を曲がった、その時だった。

「クルル……」

そこにいたのは黒いケロン人だった。顔は白い面積が多く、尻尾もある。帽子は赤く、耳のような突起がついていた。どうやら女性のようだ。

だが目を引くのはそんな事では無かった。

鮮やか過ぎる赤く鋭い目。

それが今は薄く揺らいでいる。

クルルは黙ったままそのケロン人を見つめた。

「クルル……何が……あたしどうなったの？」

クルルにはそのケロン人は全く見覚えは無かった。

だが、分かる。

これは自分の知り合いだ、と言う事が。

「弥々華、か？」

そのケロン人は首をコクコクと縦に振る。

いつそ幼いと言えるその動きが目つきの悪さと相まって、半ば滑稽に見えた。

「なにやらかした？」

「分かんないけど、気が付いたらなんか爆発して……こんな事に」
弥々華の横には、大きな箱が落ちていた。恐らく粗雑に扱われたせいで暴発したのだろう。

クルルは思わずため息を吐き出した。

「ガサツ女」

弥々華は言い返す事もせず、ぼんやりと俯いていた。

会議室にクルルの命令で召集された面々は顔を上げた。
視線の先にはクルル。

「説明するより見てもらった方が早えだろ。入りな」
何があった、と聞く暇もない。クルルは外に向かい、何気ない仕草で手招きした。

「驚くなよ」

クルルは酷く楽しそうに、笑う。現れたのは1人のケロン人だ。

「その女がどうかしたのか？」

ギロ口はケロン人を品定めするような目で見た。軽く何かを持ったように見えたのは武器を転送したせいだろう。

「……あたしが誰か、全然分かってないでしょ？」

苛立ったような声に、鉄を落としたような音がした。

「弥々華か？」

「当たり前」

タママが椅子から滑り落ち、ケロ口が目を見開く。

「うええー！？　なんでですか？」

「有り得ないでありますよ！！」

「有り得ないからこんなナリしてんでしょーが！！」

弥々華の怒鳴り声に、2人は萎縮した。いつもの数倍は不機嫌だ。

「で、何故そうなったんだ？」

「知るか！」

ギロ口の一言をたった3音で切り捨てた。

ハコブラエルソシテタヒラリガン

「恐らく地球動物兵士化銃が暴発したせいだ。地球人をケロン人に、なんてむちゃくちゃな事始めてだがな」

「それでいつ、戻るでありますか？」

ケロ口の問いに弥々華の顔が分かりやすく曇った。

「……3日後」

弥々華が放ったその言葉にケロ口は固まった。

「……ご愁傷様であります」

「それなんか違うし」

弥々華は低くツッコむと、無言で頭を抱えた。
どうやら弥々華が元に戻るまで今しばらくかかりそうだ。

T o b e c o n t i n u e d ?

オマケ

「あれ、そう言えばドロロとモアは?」「モア殿なら今買い物に言
つててでありますか……」

「ドロロはどうした?」

「あー……忘れてたであります。多分まだ弥々華殿探してるかも…
…」

「探してこい、今すぐ」

弥々華 ようこそ、ケロン人ライフ であります（後書き）

とりあえず書いたのですが、小ネタ置き場に入れるには若干長かったのでこっちに。

続くかは不明です。

作者がネタを思いついたら、ここか小ネタ置き場に書きます。

バレンタイン小話（前書き）

ちょっと早いですがバレンタイン小話です。
弥々華・モア・リップが登場。

バレンタイン小話

強く香る甘い匂いが、地下基地を満たしていた。

「モアさん、そのボールはこっちをお願いします」

緑髪をひとまとめにした少女が、褐色の少女に手を伸ばした。

「はい」

リップとデザインの似通った、柔らかな色合いのエプロンを付けているモアが手渡したのは茶色い粉の入ったボール。

「ありがとうございます。オープン頼めますか？」

「はい、分かりました」

オープンの方に駆け出すモアを見送ったリップは弥々華に視線を移し、苦笑する。

一心不乱に卵を泡立てる弥々華の顔はかなり必死だ。

「もうちょい泡立てれば大丈夫だよ」

「ん……」

黒いシンプルなエプロンの弥々華は喉の奥で返事を返す。

電動泡立て器を使わないこの作業は、要するに体力勝負。

「こんなんでどう」

「よし、大丈夫」

バニラエッセンスに茶色い粉、溶かしバターを加えたのはリップ。モアの持つてきた型にそれを流し込む。

「第2段準備完了ね」

その時、柔らかな電子音が響いた。

「焼けたかな？」

浮かれた足取りでオープンに駆け出したのはリップ。それを2人は固唾を飲んで見守る。

取り出された焼き菓子に、歓声が上がったのは次の瞬間。

ケーキクーラーに乗せられたのは小さな焼き菓子、ココア味のマドレーヌ。様々な形はケロロ小隊の階級章を模した物だ。

「これならおじさまに喜んでもらえます！！　ってゆーか感謝感激」
笑顔を見せたモアに弥々華もつられて笑みを零す。

リップは先ほど作った生地をオーブンに入れると、振り向いた。

「こっちこそ感謝してます。こんな大きなキッチンを使わせて貰えて嬉しいです！！」

はしゃぐリップを横目に弥々華はぐったりと椅子に体を預けた。

「うー、疲れた」

「弥々華、まだ焼くけど卵頼める？」

「それは勘弁して……」

三者三様の感想を残し、バレンタイン前夜は更けていく。

そして翌朝の侵略会議。

無事、ケロロとタママには甘味の効いた、ギロロとクルルとドロロには甘さを控えたココア味のマドレーヌが手渡された。

ちなみにリップの作ったお菓子はガルル小隊に送られたという。

f i n

バレンタイン小話 2（前書き）

ガルル小队＋ティト。バレンタイン小話の後日談です。

バレンタイン小話 2

ケロン軍本部はらしからぬ浮き足立った甘ったるい雰囲気満たされていた。

今日はバレンタインデー。

地球の日本という、小さな島国からケロロ小隊によって伝わったこの行事は、少なからずケロン軍にも影響を及ぼしている。

「あ、ティト曹長。これ……受け取って下さい」

「ああ、どうも」

ティト イクス、16歳。

ケロン軍ではそれなりにモテる様子。本日15個目のチョコを手に、ケロンの女性軍人達を横目で見送る。

「はあ……」

吐き出したのは、喜びではなくうんざり気味の溜め息。

「甘い、嫌いなんだよな」

どうせトロロやリップの菓子として消費されるのだろうと思うとある種の同情ともいえる溜め息が漏れる。

無造作に超空間倉庫にチョコを突っ込むと、ティトは目の前のドアを上げた。

「おはようございます」

「あ、ティト曹長。おはようございます」

「「おはよう」」

「オハヨ」

ティトはようと片手をタルルとトロロに上げると隊長であるガルルに一礼し、プルルにも会釈すると最後に持っていた鞆をデスクに置いた。

ここはガルル小隊の専用小隊ルーム。いわゆる仕事部屋だ。

「おいたるる、トロロ」

「なんすか？」

「なあに？」

ティトはパソコンに向かっていたタルルへと無造作に包みを放った。
「うわ!？」

「え？」

「ハッピーバレンタインだと」

素っ気ない表情で、ティトはデスクに向かう。

「へ？ 誰からっすか？」

「リップから。手作りだから早めに食べよ」

タルルの顔がぱあっと輝く。

「はいっす!! ありがとっつて伝えといて下さい!!」

その言葉を背中にティトはガルルとプルルにも包みを手渡す。

「毎年すまないな」

「いえ、あいつの趣味ですから」

「リップちゃんのお菓子って美味しいのよね」

「あいつに伝えておきます。きつと喜ぶから」

ティトは視線を動かして、動かして、動かして、動かして。やっと

見つけたゾルルにも包みを手渡した。

「早く食って下さいね。腐りますから」

「.....」

「分かりましたか？」

「馬鹿に.....する.....な」

トロロに至っては既に包みを開けていた。

「コレ、マドレーヌ？」

摘んだのは、渦巻きのマドレーヌ。色は焦げ茶。

それを見たティトとタルルが、無言で凍りつく。

「なんでボクがあんな嫌な奴のマークを食べなきゃなんないノ？」

「..... やらかした」

今にも泣きそうなトロロにティトはやつとこさと言った感覚で呻いた。渦巻きはクルルのマーク。ケロロ小隊の分と一緒に作り、何の気なしに入れたのだろうが

「十分地雷だ……」

その時だった。

「ゼロ……口……」

テイトの背が栗立つ。冷たすぎる殺意が、部屋を満たす。ぐしゃりと何かが潰れる音。更に風が部屋から消えた。

「そ……総員警戒態勢!!」

ガルルはすぐに立ち直る。

「ゾルルを格納庫には行かせるな!!」

「……了解」

慌てふためきながら、ガルル小隊は小隊ルームを後にする。

誰もいなくなつた小隊ルームに残っていたのは踏み潰されたドロクの階級章を模するマドレーヌだけだった。

ガルル小隊は今日も平和……なのかも知れない。

f i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2667n/>

掌編集

2011年2月17日00時26分発行